

「国語学習指導綴」・「国語学習指導表」・「国語指導計画表」

—— 尾道東高一九五三年度入学者の三年間 ——

野 宗 睦 夫

一九五三年（昭和二十八年）四月は私が高校教師になって四年目を踏み出した年である。そして国語教師としては、再出発をしようとした年である。一九五〇年（昭和二十五年）三月に広島高等師範学校を卒業して、四月広島県尾道東高等学校教諭となった。しかし、あまり腰がすわらず、一年生から三年生まで持ち上がって三年間を過ごした。一九五三年（以下53年のごとく表記）四月、再び一年生の担任と一年生の国語の授業を担当することになった。そして、この53年から学習指導の記録をとることを始めている。この記録は、53年度は「昭和28年度国語学習綴」と表紙に書いている。54年度（昭和二十九年）は「1954年度国語学習指導表（第二学年普通・生活科）」となっている。さらに55年度（昭和三十年）は「1955年度国語指導計画表（普通科国甲Ⅲ）」と変わっている。いずれも学習指導の計画と反省を書き入れた西洋紙大の記録用紙を一年分綴ったものである。同じ形式の用紙を三年間使っているのに年度毎に表題を変えている。

53年度から55年度にかけての三年間は、同一の学習者を一年・二年・三年と持ち上がった。これは、私の教師生活の中でも、その前の50年度から52年度にあっただけで、その後はなかったことである。

さらに記録をとることも、その後はカードを中心に行っているので、三年間がまとまって記録として残されたのはこの三年間だけである。こうしてみると、同一の学習者に対して高校三年間の学習指導をした記録は私にとっては唯一のものである。この記録を考察することは、いくつかの実践の課題を見出すことができると思う。また、その後の国語教師としての私にとって源泉ともいふべきものを見出せるだろう。

本稿では、この実践記録を高等学校（新制）国語科教育史を個体史の上からみて行くための試論としての役割も考えながら概観してみたい。

53年度（昭和二十八年）は、昭和二十六年の学習指導要領の規定により、国語（甲）三単位と国語（乙）二単位、漢文二単位の三本立てであった。しかし、漢文選択者がなく選択の国語（乙）が普通科全員校内必修の形をとった、ということもあって、これを甲と乙をまとめて五単位として扱った。若い教師の自由な発想を容認するおおらかさが当時の学校内にあったのであろう。のびのびと思いつ通りに第一学年の普通科全員四クラスを週二十時間の中で取り組

んだ。

教科書は「高等標準国語・文学編一」（大阪教育図書）と同じく「言語編」であった。

53年度入学の尾道東高等学校第一学年の最初は次のような単元であった。

一 単元 自分について考える

導入 1時間

A 自己紹介の作文 1、2、3

B 国語の生活の調査 6

A' 作文の形式 2

補 これからの文章（言語編）

C エマソン日記抄（プリント） 6

補 よりよい文章（言語編）

D 心を育てる糧 古谷綱武（文学編） 5

E 私の存在 有島武郎（プリント） 5

計 27時間

この単元の指導目標は、「学習指導綴」の記録用紙の指導目標欄によれば、次のようになっている。

「高等学校入学という大きな転機に当り自己を知ることの重要性を知ると共にそこからどうしたら自分を成長させることができるかということを考え、教養の問題も起こってくる。その意味からいって高等学校三ヶ年の導入単元ともいえる。又、直接には打ち出さなければいけども三ヶ年の国語学習の基礎的態度をこの単元で養いたい。」指導目標を述べる文章としては明確さが足りない。またこなれて

いない文章であり、舌足らずでもあるが、ねらった点は理解できよう。教科書の文学編と言語編を併用し、さらにいわゆる投げ入れ教材として、プリントを用いている。こうした教材の配列の中に、この単元「自分について考える」に寄せる指導者としての意欲はうかがえる。ちなみに文学編と言語編に分かれていた当時の教科書は、言語編を扱いかねてほとんど使われない教師が多かったと思う。そうした周囲の事情の中で敢えて融合させようとしたのである。

次の単元は53年6月8日曜日から始まっている。これが現在わかるのは、この6月8日から「日誌」とだけ書かれた「学習指導日誌」をつけ始めているからである。その日誌に、「昨日野地先生のところへ行き単元の教示をうけ」とか、「新しい単元へ入る期待のためか疲れなかった」とか、「導入のむずかしさを又してもしられる」とか書いてある。

二 単元 小説を読もう

導入 1

A 教養としての文学 谷川徹三（文学編） 7

B 猫きち 野濤七生子（文学編） 3

C 赤まんまの花 堀 辰雄（文学編） 4

D 犬ほか二編 ツルゲーンネフ（文学編） 2

E 耳なし芳一 ハーン（文学編） 4

F 文学を成り立たせるもの 中野好夫（文学編） 5

計 26時間

単元の性格上、文学編のみで構成されている。学習指導の方法としては、読む、書く、話す、聞くの四領域の分析表をこの単元の最

初の記録用紙にはりつけていることからみると、四領域をできるだけ指導しようとしたのであろう。

この単元の指導目標は次のように書いている。「前単元の延長として教養の重要さが問題となってくる。そうしてこの教養の中、重要な範圍を占めるものに小説がある。小説に対する興味をよび起こし、読み方を考え、この単元が終わると夏休みになるので読書することにより有意義に過ごさせたい。」

三 単元 映画と演劇の理解を深める

導入

A 演劇の創造過程の研究

演出の手引 岡倉士朗 (言語編)

水沼棒 真船 豊 (プリント)

計 25時間

この単元は二学期の授業のはじまりである9月2日から実施している。「指導目標」の欄には「生徒の日常生活と深い関係を持つ映画・演劇・放送劇に対する理解を深め、効果的な文化摂取の態度を養う。」とある。演劇に時間をかけ過ぎて映画は扱えず、放送劇はラジオ・ドラマをテープコーダに録音して聞かせただけで終わった私の知識の蓄えのあった分野であり、どうしても設定しなかった単元だけに、時間がかかった。

四 単元 短歌・俳句に親しむ

導入

A 歌はだれにでも作れる 窪田空穂 (文学編)

4

B 口語と文語 (言語編)

2

C 短歌作品 (文学編) 9

D 俳句の抒情と叙景 島田青峰 (文学編) 3

E 俳句作品 (文学編) 3

計 22時間

この単元は10月23日から実施している。この単元になると、単元設定理由と目標の二項目に分けて「指導目標」の欄に記入しているすなわち、単元設定の理由として

「1 自然の美しさを表現する一手段としての短詩形文学の理解には秋という時期が適当と考えた。

2 古典単元が次にひかえているので、その準備古いまわしになれさせる。

3 グループ学習から個人学習に移りたい。短詩形はその指導のもっとも適当な形式であろう。」

とあげている。目標としては

「1 生活を豊かにする一手段として短詩形を理解しあじわう。

2 文語になれる。

3 短詩形が作れるようになる。」

の三つをあげている。今までの単元の目標が総括的であったのが、この単元から分析的になっている。それだけ、教材が深く考えられるようになったといえよう。

五 単元 私達の生活と古典のつながり

導入 1

A 文語文法 (言語編) 1~3

B	十訓抄 (文学編)	4 ~ 11
C	徒然草 (文学編)	12 ~ 21
D	宇治拾遺物語 (文学編)	22 ~ 24
E	平家物語 (文学編)	25 ~ 31
F	現代文学と古典	32 ~ 33
G	まとめ	34

11月26日から実施しているこの単元は、第一学年では唯一の古文をとりあげた単元であった。それだけに時間数も三十四時間となっている。時間の記録の方法も、この単元からは通じた時間となっている。

指導目標としては、次のように述べている。

「入学直後の調査にもあったが、生徒は古典に漠然とした関心を有していてやりたいという希望をもっている。

この単元をやることにより

- 1 古典の意義
- 2 古典の領域にまで読書生活をひろげる
- 3 文語文法の初歩的理解
- 4 古い時代の人間、生活等の理解

という目標が考えられる。

これらを我々の現在の生活とのつながりにおいて考えてみたい。」

単元設定の理由と目標とがいっしょになったような表現である。

Fの現代文学と古典については、芥川龍之介の「鼻」と宇治拾遺物語の「鼻長僧のこと」、同じく芥川の「地獄変」と十訓抄の「絵仏師良秀」、太宰治「癩取り」と宇治拾遺物語「鬼に癩取らるること」

のそれぞれについて、研究発表の形でしている。

六 単元 漢文入門

導入 1

A よく日常使われることは (プリント) 2 ~ 4

B 和漢朗詠集 (文学編) 5 ~ 6

C 故事熟語 (文学編) 7 ~ 15

D 漢文練習 (プリント) 10 ~ 11

53年度第一学年最後の単元である。54年2月11日から実施している。「指導目標」欄に次のように述べている。

「漢文をどの程度必修の範囲で学ばせるのか、学ばせるのが適当なかわたしには分からないまま、この単元では二年になり漢文を選択する生徒の関係もあり初歩のやさしい文章が読めるようになることに目標をおく。」

導入で漢字を扱い、Aの「よく日常使われることば」で、意味・意味の由来・訓読と指導して、Bの和漢朗詠集へつないでいる。

この単元をすませて、53年度の最後の二時間を学年の評価として、学習者に一年間の反省をアンケートを中心として書かせている。そのアンケートの結果を次のように「国語学習綴」の最後の用紙に赤インクで記入している。

- 授業の進め方大体よい
- 研究発表無意味と有益の二通りに分かれる
- 時間前の復習大いによろし
- 古典の進度早い
- 研究の手引等のプリント有益

○ 教師の話法については、早口、語尾のはっきりしないが少数。
○ 作文多い、少しいつの意見に分れる。

こうして、53年度の記録は一年間ともかくも続けられた。国語学習指導綴六十枚が一年間の形であった。六つの単元を百五十六時間（試験など除く）かけてやっている。この六つの単元を貫くものは、教養を中心としたとらえ方から生まれた文章の型態別単元といえる。今後さらに、単元学習についてどういう理解をしていたかという点から考察してみる必要がある。

54年度（昭和二十九年）は、第二学年の必修である国語（甲）三単位を担当した。前年度受け持った普通科全員四クラスに加えて生活科一クラスを担当した。つまり第二学年全員の国語（甲）五クラス十五時間を担当した。それ以外に第一学年の国語（乙）二単位（選択・古文）を二クラス担当した。

第二学年の国語（甲）の教科書は、第一学年の時と同じく大阪教育図書『新国語・文学編二・言語編二』である。54年度は54年4月9日から授業を始めている。なお、校舎改築のため、6月中旬まで図書室で、第二学年の私の担当の授業は行われている。

一 単元 近代詩の流れ

導入 1〜2時間

近代詩の流れ

1 島崎藤村 (一)小諸なる古城のほとり (二)千曲川旅情の歌

3〜4

2 蒲原有明 日のおちば 5〜6

3 上田 敏 鷲の歌 7
4 北原白秋 から松 8〜10

5 高村光太郎 秋の折り 11〜13

6 犀星と暮鳥・7 荻原朔太郎・8 三好達治 いずれも自習
いずれも文学編にのせられている詩である。

「国語学習指導表」と表題は変わったが、記録用紙の形式は変わっていない。その「指導目標」の欄には、この単元について次のように書いている。

「詩はとどのつまり感性的であり、ロマンチズムの産物だと思ふ。この詩と青年期とは密接な関連をもっている。また高校二年という時代は詩を要求する時期だと思ふ。日本の近代詩の流れを大きくに学習することにより、詩に向うところをひらきたい。」
今考えてみると、随分強引な目標である。

5月24日の日誌（この年は「一九五四年度国語学習指導日誌」と表題をしている）によると、「近代詩は皆さんのていらくで終ってしまった。全く目もあてられぬ。」とある。単元の主題が大き過ぎたのである。

二 単元 長編小説を読む

導入 1

A 三四郎 夏目漱石（文学編） 2〜5

B 長編小説 川端康成（文学編） 6〜9

C 姉と弟 ロマン・ローラン（文学編） 10〜15

5月24日からこの単元は始まっている。

「指導目標」の欄に次のように述べている。

「生徒の読書範囲も入学時にくらべるとずいぶん広く多彩になっている。小説などもかなり程度の高いものになっている。しかし、能率的な読み方、身につく読み方という点ではまだ十分でないような気がする。そこで長編小説を中心として

○ 長編小説の特質

○ 読書の整理

○ レポートの書き方

という点に目標をおいて指導して行きたい。」

教科書の順序では「姉と弟」「三四郎」「長編小説」である。この順序を変えたのは、長編小説の特質を明らかにするため、「三四郎」を読んだ上で、説明的文章の「長編小説」を具体的につかませるためである。「姉と弟」はカードを用いながらレポートを書く教材として扱っている。

三 単元 映画と教養

導入 1

A 映画と教養 飯島 正 (言語編) 2~6

B 映画の理解 生徒作成のプリント) 7~8

この単元は9月2日から始まっている。第一学年の単元「映画と演劇の理解を深める」が演劇だけになったことをふまえたものである。

Bについては、夏休みに入る前に、映画の歴史、映画の製作に関係する部門について個人を指名して研究するように言っていた。

また、新聞・雑誌の映画評を集めて比較すること、映画の実態調査表作成についてはグループに依頼して研究するようにしていた。

四 単元 和歌・発句

導入 1

A 万葉集 (文学編) 7

B 四季の歌 (文学編) 6

C 芭蕉と蕪村 (文学編) 家庭学習

計 13時間

9月27日から入った単元である。この単元は実施時間の記録がまた教材ごとになっている。なぜかは不明である。

「非常に大きな単元であるので限られた時間に扱うのにかなり苦労である。」と、「指導目標」欄に感想ともいえる留意事項を述べた上で、

「1 古典の単元は一年から二度目であり、前単元が散文であったのに比して、短詩形であるので、この点を利用して、理解と親しみを深めたい。

2 万葉・古今・新古今の変遷、芭蕉と蕪村のちがいをきりつかませたい。

3 我々の共感を呼ぶもの、そうでなく分りにくいものなどを理解し、祖先の心と我々とのつながり^{つながり}を考える。

4 文法も助動詞・助詞などでよく使われるものはマスターしたい。」

と四項目あげている。指導目標としての表現はまだできていない。

五 単元 紀行

導入 1

A 奥の細道 (文学編) 2~13

旅の単元をねらいながら、「奥の細道」だけに終わった一教材一単元である。能力別のグループを作って指導している。

六 単元 郷土と文学

導入 1

A 漢詩 頼山陽・菅茶山 2~3

B 和歌 吉井勇・中村憲吉 3~5

C 小説 田山花袋・志賀直哉・林芙美子・井伏鱒二 6~16

D 郷土語の反省 17

E 生徒作文 18~22

まとめ 23

学習者に興味・関心を持たせる教材はないかと考え続けている中に生まれ、おのずから単元学習の形をとったのが、単元「郷土と文学」といってよい。考え続ける姿勢を持っていると、いつかは形をとってくることを示唆している。この「郷土と文学」は今日いわれている総合単元の形をとっている。尾道を中心として、理解と表現文章形態、古典と現代文と、今日の総合化の理念の全てを持っている。総合化ということも形にこだわるものでなく、学習者を中心に据えて学習指導を考える時自然に形に表れるものではないかと思う。

55年1月10日から実施したこの単元は、三学期中かかった。

54年度の「国語学習指導表」はこうして六つの単元を八十五時間で実施した記録となっている。記録用紙は八十二枚ある。三単位八十五時間は少ないようであるが、年休・出張などの自習を除き、試験を除いた日数である。さらに校舎改築があり、54年6月16日の「国語学習指導日誌」に「一週間ぶりに授業。落成式・記念祭で少

しごたごたした」云々の記事があるので、特にこの年は少ないのであろう。

55年度（昭和三十五年）度は、第三学年普通科の国語（甲）三単位四クラス十二時間と、第二学年普通科の国語（乙）二単位四クラス八時間を担当している。第三学年の国語（甲）はいうまでもなく、54年度第二学年普通科の生徒全員を持ち上がったわけである。教科書も大阪教育図書「新編国語」であり、「文学編三・言語編三」である。

55年4月11日から授業が始まり、最初の単元は、論説文を中心とした単元である。

一 単元 美の探究

導入 1時間

A 二月堂 井上政次（文学編） 1~6

B ロダンの言葉（文学編） 7~10

C まとめのテスト 11

「国語指導計画表」と名称だけを変更した記録綴の最初の用紙に「指導目標」として、

「○ 美に親しむ態度を養う。」

○ 今までの二年間の単元は文学的素材が多かった。年齢的にいっても更に広い視野へ興味をむけさせたい。しかも仏像とか建築とか単に「好いなあ」の段階からさらに深く鑑賞段階へ導く基盤にしたい。」

と述べている。この単元は当時、私自身が関心を持っていた分野で

もあつた。

二 単元 古典の世界

導入 1

A 源氏物語(文学編) 2~12

B 俊寛(文学編) 1~5

C 平太郎殿(文学編) 1~3

まとめ 4~5

計 22時間

この単元は55年5月10日から実施している。「源氏物語」は桐壺の巻の命婦が桐壺更衣の母君を訪れる部分と、若紫の巻の源氏が紫の上を初めて見る部分である。「俊寛」は謡曲である。「平太郎殿」は西鶴の「世間胸算用」にあるものである。いずれも教科書にあるからとりあげたもので、三つの作品につきなかりを考えただけではない。「指導目標」の欄に

○ 注釈書を利用する態度

○ 文章法の初歩

今まで、文法という品詞分解だけに終っていたので、これを文章法の立場から指導したい。

と述べている。文章法の初歩に関しては、理念だけに終わっている感があるが、佐成謙太郎「対訳源氏物語」を用いたり、「俊寛」のレコードを聞かせたり、「平太郎殿」のあらすじを四百字以内にとめさせたりして、古典を口語訳だけにしない指導のくふうは見られる。

三 単元 評論

導入 1

A 先師のことは 去来抄 (文学編) 1~7

B 徒然草論 小林秀雄 (文学編) 1~4

C 散文精神と韻文精神 岡崎義恵 (文学編) 1~7

計 18時間

9月6日から始まっている。「指導目標」の欄には「断片的にはこのジャンルはあつかってきだが、まとまって扱うのはこれが唯一である。」と述べているだけで、単元を統括する目標は設定していない。

四 単元 国語の反省

導入 1

A 国語の直面している困難 2~8

I 民衆の国語 小林英夫 (言語編)

II 国語白書(言語編)

B 言語生活の問題点 西尾 実 (言語編) 1~3

C 美しい日本語 大木惇夫 (言語編) 1~5

計 16時間

この単元は10月28日から実施している。「指導目標」の欄には、

「1 国語の直面している困難

2 自分たちの周囲をとりまいている困難

3 明日の国語のために」

と述べている。

五 単元 世界文学への旅

導入 1

A. 文学の伝統（阿部知二）（文学編） 2～6

B. ヴェニスの商人 シェークスピア（文学編） 1～4

C. 老人 パルザック（文学編） 1～4

計 14時間

11月8日から始まった第三学年最後の単元である。AとCは教科書の単元「文芸の旅」の中に「ファウスト」ともにあった。「ヴェニスの商人」は教科書の単元「古典劇」として、「俊寛」「年来稽古」「丹波与作」ともにあった。「俊寛」は「古典の世界」で扱っている。

この単元は、単元を統括する指導目標を記入していない。

55年度は「国語指導計画表」を六十四枚使っている。時間数は八十一時間である。

55年度第三学年は五つの単元を設定している。この年度で注目されるのは、五つの単元の中、三つまでが論説文を中心とした単元だということである。

こうして三年間の学習指導の記録は終わった。56年2月3日の

「学習指導日誌」には、

「三年今日は最後。これで学習指導の一切はおわり。とうとうくるところまで来たという感じである。ゆっくり考えてみたい。」と書きつけている。

この三年間の学習指導の記録がもたらしたものをあげてみると、次の三点になる。

1. 記録することにより、学習指導に対するとらえ方が深められ

る。

気負いから記録し始めたにしても、気負いだけで三年間二百枚余りの記録用紙を残すことはできない。そこに忍耐が必要だった。学習指導の事実を記録してみようと出発したのが「国語学習指導綴」であった。これを続けている中に、事実の記録の前にある指導計画をどうするかに力点がおかれるようになり、「国語指導計画表」となったであろう。始めは予定の変更も多いし、赤インクで書き込まれた反省・訂正も多い。次第に計画通りに行くようになっていく。

2. カードによる教材研究を生み出す

三年間学習の記録をとったことから、この記録を生かすことを考えるのは当然である。この三年間は学習記録をとることとカードをとることを併用していた。しかし、過去の実践を生かすことを考えたときカード中心に切り換えるようになった。方法の切り換えは、一つの方法を徹底的にやってみて、可能であったといえる。カードによる教材研究が単なる思いつきでなく、内からの要求となるためには、学習指導の記録をとる三年間が必要だった。

3.

国語科教育の実践における問題点や課題をとらえる目を育てる

53年度からの三年間の実践は、混沌とした実践であり、自分の恥を書きとめたともいえるものである。しかし、記録していなければその当時の日常生活の中に埋没し、消えてしまつて、三十年経った今日、思い出すことは不可能である。記録として残されたことにより、56年度以降、私はこの記録を出発点として、作文や論説文の指導体系へ思いを潜めるようになった。

自分の実践をありのままに記録し、集積することにより、おのずから私の進むべき道を開いたのが53年4月から始めた三年間の学習指導の記録だったといえる。

注1

単元 第 学年 自 月 週 至 月 週 総時間

指導目標	指導計画	学習活動	時間 配当	準備計画	備 考

「第 学年 自 月 週 至 月 週 総時間」は、53年度
 の中途からなくなっている。

注2 次のような簡単なものであった。

月 日 曜 天	月 日 曜 天
---------	---------

注3 拙稿「カード法による国語教材研究」(国語教育研究・第二十六号・野地潤家先生還暦記念特集)に詳細については述べている。

(84・8・23)

(広島県立福山誠之館高等学校教諭)
 (現広島県立福山誠之館高等学校定時制・教頭)